

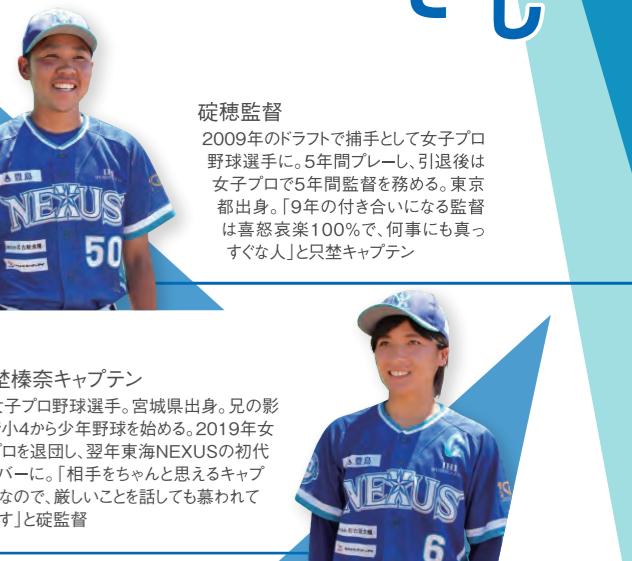


一宮を拠点に、中部女子野球をけん引し 日本一になれる強いチームを目指して



2020年春。「東海NEXUS」は産声を上げた。

「連結／連鎖／繋がり」の意味を持つNEXUSに込められた想いとは…。



碇穂監督
2009年のドラフトで捕手として女子プロ野球選手に。5年間プレーし、引退後は女子プロで5年間監督を務める。東京都出身。「9年の付き合いになる監督は喜怒哀楽100%で、何事にも真っすぐな人」と只埜キャプテン

只埜榛奈キャプテン
元女子プロ野球選手。宮城県出身。兄の影響で小4から少年野球を始める。2019年女子プロを退団し、翌年東海NEXUSの初代メンバーに。「相手をちゃんと想えるキャプテンなので、厳しいことを話しても慕われています」と碇監督

創部2年目で全国3位の快挙

女子硬式野球において国内最大の大会の一つ、伊予銀行杯全日本女子硬式野球選手権大会。その第17回大会が8月に開催され、創部2年目であるにもかかわらず見事第3位に輝いた「東海NEXUS」(以下東海ネクサス)。一宮市を拠点とするクラブチームだ。

率いるのは碇穂監督。チーム創設の発起人でもあり、女子プロ野球チーム・愛知ディオーネの監督も務めていた。2018年から一宮市をホームタウンとして活動し、年間女王にもなった愛知ディオーネは、日本女子プロ野球機構の体制整備に伴い2020年シーズンから本拠地が京都市に移転。しかし、碇監督は一宮に残ること決断する。

「中部地区の女子野球は、関東や関西に比べると10年ほど遅れている。それがいるのは碇穂監督。チーム創設の

愛起人でもあります。女子プロ野球チーム・愛知ディオーネの監督も務めていた。2018年から一宮市をホームタウンとして活動し、年間女王にもなった愛知ディオーネは、日本女子プロ野球機構の体制整備に伴い2020年シーズンから本拠地が京都市に移転。しかし、碇監督は一宮に残ること決断する。

「中部地区の女子野球は、関東や関西に比べると10年ほど遅れている。そ

てみた。「もともと後輩を気遣う選手はそろつっていましたが、練習や試合を重ねた夏頃には後輩からも気づいたことを言える、いい雰囲気になってしましました」と只埜キャプテン。経験や年齢にとらわれず選手同士で切磋琢磨するチームの様子がうかがうかがえる。

「キャプテンや年齢が上の人間が、すごく頑張ってくれています。だから後輩たちはそれについていくしかないんですよ」と笑顔で話す碇監督は、選手、「コーチ監督と野球人生を歩んできた後輩たちが頑張るチームはあまり強くはないが、先輩たちが頑張るチームは強い」という監督の言葉の裏には、「このチームは強くなる、強い」という確信があるに違いない。

以下の課題は、「自分たちの野球」をして、入団を望む選手を増やしていくこと。

女子野球

「自分たちの野球」とは、選手一人ひとりが役割を持つ「全員野球」だ。自分が打てなくとも仲間が打って得点につながる、自分が投げられなくとも仲間がフォローしてアウトが取れる、全員がチームのワンピースとして機能する野球。

「自分の力が本当に必要とされているのかがわからない野球をする野球よりも、全員じゃないと勝てないこのチームでする野球のほうが断然楽しい」と只埜キャプテンは言う。全員野球こその楽しさがプレイヤーにはあるようだが、その楽しさは観る側にとっては面白さになる。

「強いチームには、組織力」と自分もチームメイトも、信じる力が必要です。これを選手に伝え、本当の野球の楽しさを知るチームにしていきた」と碇監督。本当の野球の楽しさを知った選手たちが、自分たちの野球を表現する。それを観れば、入団希望者や女子野球を面白いと思う人が増えていく、

地域から愛されるチームに

チームへの入団は、高校生以上であれば経験の有無は問わない。唯一の条件は、本気で野球をやりたい気持ち。

「できなくても必死に頑張る人間を周りは必ず応援します。そんな応援される人間であればチームには是非迎えた」と碇監督。経験が浅くても強い気持ちを持った伸びしろが楽しみな選手もいるという。只埜キャプテンは「副キャプテンたちとともに監督が目指す野球、チーム目標を確認しながら、チームを引っ張り、若い選手を育てていきま

す」とも話してくれた。

「自分たちの野球」には、選手一人ひとりが役割を持つ「全員野球」だ。自分が打てなくとも仲間が打って得点につながる、自分が投げられなくとも仲間がフォローしてアウトが取れる、全員がチームのワンピースとして機能する野球。

「自分たちの野球」には、愛知岐阜・静岡西部・福井にある高校・大学・クラブの計10チームが所属。年間リーグをはじめセンターーナメント、全日本女子硬式クラブ野球選手権大会中部予選が行われている。東海ネクサスはこの中部予選でも勝利しており、10月9日(土)から3日間、中部地区代表として再び全国大会で戦う。

2020年2月、「女子野球選手の活動の場の創出」、「未来を担う子どもたちが健やかに育つ環境作り」、「地域雇用への貢献」を目的に掲げ東海ネクサスが発足。同年3月から一宮を中心とした地元企業の支援・協力のもとチーム活動をスタートしたが、登録選手は6名。規定に満たなかつたためチーム単独での公式戦参加は叶わず、また新型コロナ感染拡大の影響もあり、何かと決めました」。

2020年2月、「女子野球選手の活動の場の創出」、「未来を担う子どもたちが健やかに育つ環境作り」、「地域雇用への貢献」を目的に掲げ東海ネクサスが発足。同年3月から一宮を中心とした地元企業の支援・協力のもとチーム活動をスタートしたが、登録選手は6名。規定に満たなかつたためチーム単独での公式戦参加は叶わず、また新型コロナ感染拡大の影響もあり、何かと決めました」。

セントラーリーグには愛知岐阜・静岡西部・福井にある高校・大学・クラブの計10チームが所属。年間リーグをはじめセンターーナメント、全日本女子硬式クラブ野球選手権大会中部予選が行われている。東海ネクサスはこの中部予選でも勝利しており、10月9日(土)から3日間、中部地区代表として再び全国大会で戦う。

「ゼロからスタートして、やつとチーム手が力を試せる場所の創設を願つて、碇監督が尽力したことは言うまで

れがすごく気になっていた」と碇監督。

例えれば関東にはヴィーナスリーグという巨大リーグがあり、選手は毎週のよう

に公式戦で力を試し、どんどん成長していくという。「中部地区にも選手が力

を試す場をつくりたい、中部の女子野球を引っ張っていく日本一を目指す

チームをつりたい」と思って、一宮に残ることを決めました」。

と苦難を強いられる1年となつた。

そして今、シーズン。コロナ禍ではあるが、体制は整い、公式戦への単独参加が可能に。また4月には中部地区的女子

野球の発展とし振興を目的に「セントラーリーグ」を運営する「中部女子硬式野球連盟」が発足。この発足にて

手が力を試せる場所の創設を願つて、碇監督が尽力したことは言うまで

もない。

セントラーリーグには愛知岐阜・静岡西部・福井にある高校・大学・クラブの計10チームが所属。年間リーグをはじめセンターーナメント、全日本女子硬式クラブ野球選手権大会中部予選が行われている。東海ネクサスはこの中

部予選でも勝利しており、10月9日(土)から3日間、中部地区代表として再び全国大会で戦う。

「ゼロからスタートして、やつとチーム手が力を試せる場所の創設を願つて、碇監督が尽力したことは言うまで

れがすごく気になっていた」と碇監督。

そして今、シーズン。コロナ禍ではあるが、体制は整い、公式戦への単独参加が可能に。また4月には中部地区的女子

野球の発展とし振興を目的に「セントラーリーグ」を運営する「中部女子硬式野球連盟」が発足。この発足にて

手が力を試せる場所の創設を願つて、碇監督が尽力したことは言うまで

れない」と碇監督。

それでも、選手を除く選手と監督は地元企業に務めている。活動日は水曜午後と土日祝日。一宮市営球場をメイン

ランドに、4名のボランティアコーチ陣とともに練習に励んでいる。

チームの雰囲気はどうなのだろう。

元女子プロで侍ジャパン女子代表のメンバーや、元女子プロで侍ジャパン女子代表のメンバーである只埜榛奈キャプテンに聞い

て、只埜榛奈キャプテンは、「自分たちの野球」とは、選手一人ひとりが役割を持つ「全員野球」だ。自分が打てなくとも仲間が打って得点につながる、自分が投げられなくとも仲間がフォローしてアウトが取れる、全員がチームのワンピースとして機能する野球。

現在、選手は18歳～27歳の11名。元

女子プロや高校・大学での経験者だけ

ではなく、野球を始めて数年の選手もい

る。学生を除く選手と監督は地元企

業に務めている。活動日は水曜午後と

土日祝日。一宮市営球場をメイン

ランドに、4名のボランティアコーチ陣

とともに練習に励んでいる。

チームの雰囲気はどうなのだろう。

元女子プロで侍ジャパン女子代表のメンバーや、元女子プロで侍ジャパン女子代表のメンバーである只埜榛奈キャプテンに聞い

て、只埜榛奈キャプテンは、「自分たちの野球」とは、選手一人ひとりが役割を持つ「全員野球」だ。自分が打てなくとも仲間が打って得点につながる、自分が投げられなくとも仲間がフォローしてアウトが取れる、全員がチームのワンピースとして機能する野球。

現在、選手は18歳～27歳の11名。元

女子プロや高校・大学での経験者だけ

ではなく、野球を始めて数年の選手もい

る。学生を除く選手と監督は地元企

業に務めている。活動日は水曜午後と

土日祝日。一宮市営球場をメイン

ランドに、4名のボランティアコーチ陣

とともに練習に励んでいる。

チームの雰囲気はどうなのだろう。

元女子プロで侍ジャパン女子代表のメンバーや、元女子プロで侍ジャパン女子代表のメンバーである只埜榛奈キャプテンに聞い

て、只埜榛奈キャプテンは、「自分たちの野球」とは、選手一人ひとりが役割を持つ「全員野球」だ。自分が打てなくとも仲間が打って得点につながる、自分が投げられなくとも仲間がフォローしてアウトが取れる、全員がチームのワンピースとして機能する野球。

現在、選手は18歳～27歳の11名。元

女子プロや高校・大学での経験者だけ

ではなく、野球を始めて数年の選手もい

る。学生を除く選手と監督は地元企

業に務めている。活動日は水曜午後と

土日祝日。一宮市営球場をメイン

ランドに、4名のボランティアコーチ陣

とともに練習に励んでいる。

チームの雰囲気はどうなのだろう。

元女子プロで侍ジャパン女子代表のメンバーや、元女子プロで侍ジャパン女子代表のメンバーである只埜榛奈キャプテンに聞い

て、只埜榛奈キャプテンは、「自分たちの野球」とは、選手一人ひとりが役割を持つ「全員野球」だ。自分が打てなくとも仲間が打って得点につながる、自分が投げられなくとも仲間がフォローしてアウトが取れる、全員がチームのワンピースとして機能する野球。

現在、選手は18歳～27歳の11名。元

女子プロや高校・大学での経験者だけ

ではなく、野球を始めて数年の選手もい

る。学生を除く選手と監督は地元企

業に務めている。活動日は水曜午後と

土日祝日。一宮市営球場をメイン

ランドに、4名のボランティアコーチ陣

とともに練習に励んでいる。

チームの雰囲気はどうなのだろう。

元女子プロで侍ジャパン女子代表のメンバーや、元女子プロで侍ジャパン女子代表のメンバーである只埜榛奈キャプテンに聞い

て、只埜榛奈キャプテンは、「自分たちの野球」とは、選手一人ひとりが役割を持つ「全員野球」だ。自分が打てなくとも仲間が打って得点につながる、自分が投げられなくとも仲間がフォローしてアウトが取れる、全員がチームのワンピースとして機能する野球。

現在、選手は18歳～27歳の11名。元

女子プロや高校・大学での経験者だけ

ではなく、野球を始めて数年の選手もい

る。学生を除く選手と監督は地元企

業に務めている。活動日は水曜午後と

土日祝日。一宮市営球場をメイン

ランドに、4名のボランティアコーチ陣

とともに練習に励んでいる。

チームの雰囲気はどうなのだろう。

元女子プロで侍ジャパン女子代表のメンバーや、元女子プロで侍ジャパン女子代表のメンバーである只埜榛奈キャプテンに聞い

て、只埜榛奈キャプテンは、「自分たちの野球」とは、選手一人ひとりが役割を持つ「全員野球」だ。自分が打てなくとも仲間が打って得点につながる、自分が投げられなくとも仲間がフォローしてアウトが取れる、全員がチームのワンピースとして機能する野球。

現在、選手は18歳～27歳の11名。元